
A Mothers lullaby

D.E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A Mothers Lullaby

【Nコード】

N2505F

【作者名】

D・E

【あらすじ】

1945年の、8月6日。広島を焼くした、ひとつの原始爆弾。一瞬にして地獄と化したヒロシマを、少女はひとり歩きつづける。

序（前書き）

序章ですが、しっかり読んで歴史的背景も掴んでください。

序

あさひは国民学校の3年生になると、厳しくなる戦局のなか、いよいよ本土空襲が始まることを聞いた。

アメリカ軍による、

無差別爆撃がそれだ。

狙うのは軍需施設や大都市であつた。

昭和20年、3月10日に東京は焼け野原と化した。

あさひは同年7月に広島県呉市で空襲を体験する。

家は焼かれてしまい、

母と二人で広島市にいる

知人の家に住まうことになった。

転校先の学校では、

朝鮮人の姿がたびたび見られた。

生徒たちは数人の朝鮮人が校門から入ってくるのを見ると、さつさと校舎に入っていくてしまった。

あさひは、彼らがなにをきに学校に来ているのかしらないけれど、とりあえず

朝鮮人は避けていた。

彼らもまたあさひたちを

睨んでいたからでもある。

あさひは一度だけ

母親に朝鮮人のことを聞いてみた。

だが黙ったまま知人の

畑仕事を手伝いにでかけてしまった。

どうやら聞いてはいけないことらしいとあさひは察した。

8月になった。

あと数日で戦争は終わるなんて誰も思っていなかった。

そして

終戦よりも人々にとって

思ってもみないことが

あさひを襲うのだった。

母の子守唄（前書き）

点線を境に場面が変わります。

母の子守唄

広島市につづく一本の道。わきに古い大きな木がある

その木は、何十年もの間、いろんなものを見てきた。

子供が側で遊ぶなんて

もう何百回と見てきたし、今でも野球や虫とりをする子供達を見る。

その度に、

木はあのことを思い出す…

最近では夜になっても

木の側の道を通る人が見えるようになった。

とは言っても、

そのほとんどは車だ。

広島の街も、

すっかり都会になってしまい、

木の葉に街の光が反射する。

まぶしいが

あのととき広島を染めていた

赤くおそろしい光よりは、

マシではあったが。

ある夏の夜。

木は子守唄を聞いた。

美しく、優しい歌声だった。

母親が幼い娘に歌っているようだ。

二人は幸せそうだった。

しかし木は、

それを見て悲しくなる。

あのことを思い出したのだ。

辛く、悲しい

ヒロシマの悲劇を。

その日の朝。

広島は快晴だった。

B - 29（アメリカの大型爆撃機）は作戦開始の合図を受けると、

3メートルにおよぶ爆弾を、
広島街におとす。

「あさひ！」

母親の声が外から聞こえた。
あさひは家から裸足のまま外に出ると、
母親の指差す空を見た。黒く、大きな鳥のようなものが飛んでいた。

「ひこつぎ！」

あさひはワクワクした

そんなあさひに母親は
静かに言う。

「お父ちゃん、あれをやっつけているのよ」

「どうして？」

あさひにはわからなかった。

「あの飛行機はね、お母ちゃんやあさひをコロしてしまっの。」

「あさひを？」

「そう。だからお父ちゃんがそうさせないようにやっつけるの。」

「ふん」

「あさひ、家を燃やされちゃったわよね？あれもあの飛行機の仕業なのよ」

「おうち……………」

あさひは、はっと何かを思い出すと、叫んだ。

「かくれなきゃ！」

「大丈夫よ。警報もならないし、またいつもの偵察飛行でしょ。」

あさひには、

警報も、偵察飛行もなんのことかわからなかったが、

大丈夫だと聞かされると、

家にもどり、

支度をして学校に向かった。

地獄のヒロシマ

校庭に並ぶと、

先生の掛け声と共に

生徒はそろって体操を始めた。

軍服をきた先生たちは、

上空を飛び回る飛行機に向かい、

大声をかけはじめた。

「鬼畜米英！神州への侵入による我らが軍神の鉄槌をつけることな
かれ！」

「爆弾抱えて海の藻屑となれ！」

いくつかの生徒はまねして騒ぎ立てた。

「勝て勝てにつぼん！」

「ぐんしん敵なし！」

「てんのーへーかばんざあい！」

あさひは仲のいい数人に
先程のことを話した。

「へえ。あさひちゃんのお父ちゃん、すごいねえ」

「わたしのお父さんは死んじゃったんだって。」

「わたしも。」

あさひは
自分の父親が死ぬことを、
この時始めて考えた。

その時だった。

目の前が青白い閃光に包まれたかと思うと、
轟音とともにものすごい衝撃が
あさひを吹き飛ばした。

目を開いた。

あたりは煙におおわれていた。

そして、

寒くもあり、冷たかった。

ごおおお

という音がくぐもって聞こえる。

「うう」

あさひは校舎の陰にいたので3000度の熱線を浴びずにすみ、傷もかすり傷ですんでいた。

なにがおこったのかわからなかった。

ふと、

煙がはれた。

あさひは目をこらす。

黒いものが横たわっていた。

たくさん。校庭中に。

立って歩くものもあれば、
這いずるものもあり、
動かないものもあった。

それが人間であることは、
にわかには信じがたく、
恐ろしい光景だった。

ふと横を見れば、
スタボロの服に縫い付けてある名札から
転がっているものは
さっきまで話していた生徒であることがわかった。
目の前あるものに、
あさひは思わず飛びのいた

「きやあああ！みよこちゃん！」

しばらくあさひは黙り込んだ。

…………お母ちゃん！

あさひは走り出した。

しかし

どこをみても見渡すかぎりの地獄で、人間と呼べるものもなければ、家ひとつない。

「お母ちゃん！どこ！」

ズルッ。

何かを踏んで転んだ。

あさひは踏んだものをみて
叫び声を張り上げた。

走って、走って、走った。

目は真っ赤に充血し、
足は血だらけだった。

「お母ちゃん！たすけて！怖いよお！」

どこからか

よくわからない声が聞こえはじめた。

「アイゴー。アイゴー！」

朝鮮人だったのだが、

誰がみてもそこらの人間とかわりはなかった。

あさひは再び前向かった。

どこに向かっているかわからぬまま。

小さな母親

「かあちゃん！かあちゃん！」

どこからか幼い男の子の
叫び声が聞こえる。

あれ以来始めて聞く
まともな人間の声だ。

行ってみると、男の子は、
焼けて炭のようになった
家の前を行ったり来たりしながら
泣きわめいていた。

そしてすぐ近くまでに
炎の波が迫っているのがみえた。

あさひは空襲のときを思い出した。

たくさんのひとが、
いきなり引き返してきたかとおもつと、
一瞬にして炎に飲まれてしまったのを。

あの子もそうなくなってしまふ！

あさひは急いで
男の子の手をひいて、
とにかくその場を離れた。

男の子とあさひは、
大きな木の下に座った。
泣きつづける男の子に、
あさひはそつと言う。

「泣かないで。お母ちゃんはいこいよ」

あさひは母親になりきってみたが、泣き止まない。

「いいこにして。ね？」

あさひは

呉の空襲を再び思い出した。

たしかあのあと、

荷物ぐるまに乘せられて、母親と一緒に広島に向かった。

その時に母は、

なにかを聞かせてくれた…

「子守唄・・・」

つぶやくと、

泣きつづける男の子を

膝にのせ、抱き、子守唄を歌った。

木の周りには、

たくさんの人が集まっていたが、

ほとんど死んでいた。

小さな母親の歌声は、
ずっと続いた。

その声は次第に弱くなる。

男の子の泣き声はいつの間にかやんでいた。
そして息を引き取っていた。

それでもあさひは歌いつづけた。

かほそく、
消えそうな声で。

目はうつろだった。

ひとしきり歌い終わると、
「お母ちゃん……」
と呟き、また歌い始めた。

かすれた歌声もやがて消えて、あさひは横たわる。

「.....」

あさひは
再び目を開けることも、
歌を歌うこともなかった。

Memorial of Hiroshima

真下の少女が
歌うのをやめたとき、

木は彼女が死んでしまったことを悟った。

木はなにもできなかった。

死んでいく人々を、
弱くなつていく歌を聞きながら見ておくことしか。

そして
その歌も消えた。

8月6日がおわり、
ヒロシマは8月7日の朝を向かえる。

空はまだ明けない。

原爆が炸裂してから、

ヒロシマは夜ように真っ暗で、燃えていた。

その渦巻く炎の赤い光が、木を不気味に照らしていた

広島はしんだ。

少女も、何万人の人も。

なにかかもを焼き尽くされて、広島はしんだ。

それでも。

ヒロシマに朝がおとずれた

昼間から真っ暗だった
ヒロシマの街を、

朝日が明るく照らした。

昭和20年8月15日。

日本は戦争に負けた。

あさひの母親は、
原爆で即死していた。

戦闘機乗りとして
戦争に行っていた父親は、これよりもずっと前に戦死しており、あ
さひには伝えられていなかった。

戦争はなくなつたが
この日の悲劇の記憶は、
なくならない。

――

あれから60年以上が過ぎ木が戦争を見ることはない

そして

あの小さな母親の子守唄は今も木の記憶に残っている

作者後書き

こんにちわ。

「A Mothers lullaby」の
著者のD・Eというものです。

この作品はですね

中学三年の英語の教科書に載っていたのを詳しくしてみたものなんです。

原作版だと非常にシンプルで少女の名前はありませ^{あさひ}んし
原爆をうけた街の様子
こともほとんどふれてません。

木が二人の親子の子守唄を聞いて、少女が歌っていたことを思い出
し、回想がはじまります。

その回想も、やや薄く、
いきなり少女と男の子が
木の下にいらるところからはじまります。

そして、
少女が死んでしまふところでおわります。

しかも全て木視点。

なんか人々に

「私の陰で休んで。きっとよくなるから」なんて話しかけちゃってますし

それはさておき、

今回これを書くにあたっていろいろ工夫したことがあります。

まず

会話に方言を使いませんでした。

普通なら、あんな話し方は誰もしません。

ただ、

みなさんが読みやすいようにと、変えてみました。

それから

「あさひ」という名前も少し変わってますよね。当時であさひという名はあまり聞きません。

これはみなさんが親しみやすいような名前で、オリジナリティもだ
したい感じでつけてみた名前です。

小学3年生にしては、少し幼い感じでしたかね（汗）

ちなみに

あさひの母親は としこ あさひの父親は まさし 男の子は た
ける

という名前も設定として考えてました（笑）

さて、

この話を読んでいただいた感想はどうでしょうか。イマイチだっ
たかもしれません、その際は是非、

ご意見いただければ今後の小説製作に役立てていきたいと思いま
すので、よろしくおねがいします。

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2505f/>

A Mothers lullaby

2010年12月23日02時08分発行